

先回1月31日の礼拝で、エゼキエル書からイスラエルの捕囚の時代に語られた神様の救いを見ました。今日はその後の帰還の物語です。この出来事はイエス様を知るために大切な二つのことを教えています。一つは、イエス様のころの社会を形作っていた人間の罪「律法主義」とは何か。もう一つはイエス様がいかに預言と一致した救い主であるかです。

聖書を開きましょう。ゼカリヤ書 8章 1-17 節です。

背景

北イスラエル王国はアッシリアによって、南ユダ王国はバビロニアによって連れて行かれ、エルサレム神殿が破壊されました。これが捕囚です。捕囚とは神様に逆らい続けたイスラエル人が立ち返るためになされた処置です。彼らにとって捕囚とは自分の罪の自業自得の結果でした。

ところがその後、誰も予想していなかったことが起こりました。バビロニアが今度はペルシャによって滅ぼされたのです。ペルシャのキュロス王は、ユダヤ人にエルサレムに帰って、神殿を再建することを許します。かくして一度滅ぼされた神殿は70年後に再建されました。これが念願の帰還と第二神殿復興の物語です。

この時、預言者として立てられたゼカリヤは神様の平和を語りました。

1. 熱情

聖書は時々、常識では考えられない理論展開をします。しかしこの不可解な話の筋の中に、神様の真理を開く鍵が隠されています。

今日のところでは2.3節です。2節で神様は「激しい憤りを持って熱情を注ぐ」と言われます。ところがその憤りを持って何をなさるかと言えば、3節に「わたしは再びシオンに来て、エルサレムの真ん中に住まう」と仰るのです。「私は憤るから、あなたたちを見捨てる、離れ去る」というなら人間の常識と合致して解りやすいのです。しかし神様は「私は憤りを持って熱情を注ぐから、再び人間と共に住まう。決してあなたたちを捨てられたままにしない。」と仰っています。解りにくいですね。

この謎を解くのは、神様だけが持つておられる「熱情」です。神様の熱情によって平和がもたらされるのです。「妬み」とも訳される神様の熱情とはどんなものかを8章全体の中から見ていきましょう。

2. 平和の種、ぶどうの木、天の露

3節から、神様が共に住み、与えてくださる平和の様子が続きます。エルサレムは再建され、信頼に値する都と呼ばれます。捕囚され、方々に散らされていたイスラエル人が帰ってきます。みんな長生きします。神様はその人たちの神となってくださいます。人も家畜も働き甲斐があり、ちゃんと食べることができる。敵から守られ安全だ。そしてそのクライマックスが12節に、歌のように美しい言葉で書かれています。

平和の種は蒔かれ、ぶどうの木は実を結び
大地は収穫をもたらし、天は露をください。
わたしは、この残りの者に
これらすべてのものを受け継がせる。

イスラエルを旅すると、ガリラヤ湖周辺だけが豊かな穀倉地帯で、様々な畑が広がっています。作物の種類に

よって緑の色が、薄かったり濃かったり、黄緑だったり、青みを帯びていたりして、遠くから見ると絵画のような美しさです。国土のほとんどが荒野のイスラエルで、この光景は貴重で、種を蒔くことができるとは、平和の象徴として映るのだと思います。

ぶどうは何のために植えられるかと言えば、美味しいワインを作るためです。神様は人々が食べて生き延びるだけでなく、共に一つの食卓を囲んで語り合う、楽しみを与えてくださいます。

植物が根付くようになると、2つ良いことが起こります。一つはもちろん豊かな収穫。そしてもう一つは、大地を覆う朝の露です。イスラエルの植物は、わずかな朝露を体中の小さな毛で集めて生きています。集められた滴が朝日を浴びて虹色に輝く光景は、創造主の美しさを讃美する被造世界の歌です。

3. 熱情の二つの面、呪いが反転して祝福へ

この平和を誰に与えるかと言えば、捕囚され、かつて呪いとなったイスラエルの民です。神様が民を救い出すので、彼らは祝福となる。と言う驚くべきことが書かれています。私たちは「もし神様に裁かれ呪いを受ける身になってしまったら、祝福は永遠に取り去られる」と思ってしまいます。しかし神様は正しく歩み続けた民ではなく、罪に追いやられて呪いとなった民をこそ祝福なさる方です。

それがいかに確かなことかを神様は14節で仰っています。「まことに、万軍の主はこう言われる。あなたたちの先祖がわたしを怒らせたので、わたしはかつてあなたたちに災いをくだす決意をして悔いなかった。そのように、今やわたしは再びエルサレムとユダの家に幸いをもたらす決意をした。」

なんと面白い表現でしょう。捕囚を受けた民が何を一番確かな、強烈なこととして経験したかと言えば、神様の怒りです。神様が決意した災いがいかに徹底的かです。「神様は災いの決定を悔いることなく果された。」とは彼らの実感でした。それほど確かに「再び幸いを与える、そう決めた。」とおっしゃったのです。にわかには信じられないほど、鮮やかな転換です。そこでびくびくしている民に「恐れてはならない」と言って締めくくっています。

さて申命記で神様は「私はあなたの前に祝福と呪いを置いた。あなたは祝福を選びなさい。」と仰いました。私たちは常に祝福を選ぼうとするべきです。しかし祝福と呪いは常にそろって私たちの前にあります。イスラエルの捕囚と帰還の歴史を振り返ると、神様の怒りと愛、呪いと祝福はコインの表と裏のように、神様の熱情の表と裏になっていることが分かります。

ここで注意したいのは、試練と呪いの違いです。原因もなく突然やってくる試練は、神様が与えてくださり、練られた品性を与えるためのものですから、辛いけれど希望を持ちやすいのです。しかし呪いは人間の罪が引き起こした、原因のある自業自得の出来事で、絶望が色濃くなりやすいものです。しかし、その人間を他ならぬ熱情の神様が裁き、神様が呪いへと下ることを許可なさるのであれば、それは神様が熱情を与えられている姿です。そしてその熱情はやがて翻って必ず祝福となります。大切なのは神様の熱情から離れないでいることです。私たちはその勇気を出しましょう。

自らの罪が招いた呪いを神様に宣言された時、なお一層近づいて神様の熱情から離れなかった人がいます。ダビデ王です。彼は最晩年、人口調査をします。これが神様の怒りに触れます。人口調査のどこが悪いのか。民の数を自分の栄華としようとしたためかもしれません、怒りの理由は不明です。大切なのは、とにかく神様は怒られたという事です。

神様は、7年間の飢饉、3か月の敵前逃亡、3日の疫病のどれかを下す。選べ。と預言者ガドを通して言いました。しかしダビデは選ばずに「主のみ手にかかって倒れよう。主の慈悲は大きい。」と神様に開け渡しました。こうして国に疫病が襲い掛かり、7万もの人が死に絶えました。自分の罪のために、民が打たれ、苦しみ、泣き叫ぶ。家族の亡骸を抱えて絶望し、涙も枯れて言葉を失う民を、ダビデはなすすべもなくただじっと見る。この苦

しみは想像を絶していました。「罪を犯したのは私です。私が悪かったのです。私を打ってください」と彼は神様にすがりつくほどでした。

しかしこの時「主はこの災いを思い返され、民をほろぼそうとするみ使いに言われた『もう十分だ。その手を下ろせ』」とあります。神様の熱情が、滅ぼしつくす前に反転して、赦されたのです。この赦しを記念してダビデは、アラウナの麦打ち場の上り、そこに祭壇を築き、神様に和解の生贄を捧げました。ここが後のエルサレム神殿の祭壇の場所になりました。

このダビデの経験は、神様の怒りから、裁きへ、続いて呪い、反転、赦し、贖い、和解、祝福に至る道筋を明らかにする物語です。

結.ロバの子に乗って平和の君が入城される。

平和の実現の中で、神様は民に、真実と正義、平和による裁きを命じておられます。すべて神様の与えられる平和に伴う結果です。

しかし実際に彼らはこの順番を逆にして受け取りました。神様の平和を勝ち取るために、正しく生きようとしたのです。律法を細分化し厳密に裁くことに熱心でした。こうして生まれたのが「律法主義」です。考えてみると、神様の言葉を用いて自分を正当化し、み言葉を剣として人を裁く「律法主義」とは、人間の行き着く最終的な罪の形と言えます。せっかく帰還したイスラエルは結局「律法主義」という新たな大罪に埋没していきました。

この律法主義を打ち砕き、人間に本当の平和を与える神様の計画は、神様の側から与えられます。その様子が、ゼカリヤ書 9 章 9 節に書かれています。

娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歓呼の声を上げよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者。

高ぶることなく、ろばに乗って来る

雌ろばの子であるろばに乗って。

ゼカリヤから 550 年ほどの時を経て、この言葉の通りにイエス様はエルサレムへと入城されました。イエス様だけは神様に従い、神様の勝利を与えられた「平和の君」ですが、誰よりも高ぶることなく弟子たちの前にひざまずき、汚れた足を洗われました。その乗り物は猛々しい軍馬ではなく、穏やかな仔ろばでした。入城の際、人々は歓呼の声をあげ、「ダビデの子」と叫びました。

しかしこの平和の君が入城して何をなさったかと言えば、人々の想像と正反対のことでした。呪いを引き受けられたのです。イエス様が十字架で受けられた呪いは、ダビデが受け続けるべき呪いです。捕囚の民が受け続けるべき束縛です。私が受けるべき裁き、滅ぼされるべき私の罪の呪いです。イエス様は十字架で「彼らをお赦し下さい。何をしているのか解らないのです」と仰ってこのすべてを引き受け、罪と死の呪いを受け、黄泉にまで下られました。パウロはこのことをガラテヤ 3 : 13 でははっきりと述べています。「キリストは私たちのために呪いとなって、私たちを律法の呪いから贖いだしてくださいました。『木にかけられた者はみな呪われてる』と書いてあるからです。」

しかし、そのイエス様を神様は復活させられました。ここに完全な罪の解決、イエス様の圧倒的な勝利があります。イエス様は神様の熱情が与える呪いの盃を余すところなくお受けになり、熱情が翻って復活を受けられました。

神様の熱情を呪いから祝福へ反転させるのは、ただキリストの十字架と復活です。ダビデが赦されるのも、捕囚の民が解放されるのも、私の罪が洗い流されるのも、ただ十字架のなせる業。ダビデが救い主の先祖として選

ばれたのも、捕囚の民が神殿を再建できたのも、私が神様の和解の中に生きるのも、ただ復活のなせる業です。

今日ここに、繰り返す自分の罪のために悩む人はいませんか。結局自分を裁き人を裁く律法主義を自覚していませんか。罪の傷跡の鋭さ、手の付けられない結果に悲しむ人はいませんか。私たちが自業自得で、神様に罪の呪いを見せつけられている今、いよいよ離れないで熱情の神様の前に行きましょう。十字架の下に遡りましょう。イエス様をよみがえらせた神様は、その呪いを祝福に変えて、あなたに美しい平和を与えてくださいます。

お祈りします

天のお父様。自業自得の捕囚の悲しみを体験すると、罪の身を呪います。あなたとの断絶を味わいます。しかしそれでもあなたの前にいさせてください。誰かの手によってではなく、あなたの手によって倒れるのなら、あなたは慈悲深い方です。あなたの熱情はその呪いを反転させて祝福に変えてくださいます。その実現のために十字架で死に、復活なされたイエス様のお名前でお祈りします。アーメン。